

四国農学連報

第 22 号

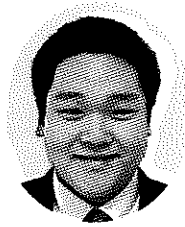
発 行 者 農 業 大 学 校 盟
四 国 地 区 農 業 大 学 校 連 盟
学 生 編 集
徳 島 県 立 農 林 水 産 総 合 技 術 支 援 セ ン タ ー 農 業 大 学 校 学 生 自 治 会

農大生活をふりかえって

四国地区農業大学校学生連盟会長
徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校

学生自治会長

笹原 悠



私は、人前で話すのは得意でしたが、今まで学生を引っ張っていくという勇

気はなく、学生の代表になりたいと思っただけではありません。徳島農大に入学してからも、農大祭までは学生自治会活動にあまり興味がなく、学生生活を普通に過ごして、四年制大学への編入を目指すつもりでいました。そんな中、私の明るさが先輩方の目に留まったのか、農大祭恒例行事の料理ショーの司会や、その他のイベントの司会を任せられることになりました。いきなり司会に指名され、正

ッ大会では、想定外のことでもしっかり対処してくれた学生や、各県の農業大学の皆さんの協力があり、無事に終了することができたと思っております。

農大祭では農大のビックイベントであることから私もプレッシャーを感じ、昨年の農大祭のようにうまくいかなかったの不安もありました。こちらも先生方と学生の協力のおかげで成功させることができて本当に良かったと思います。すし、感謝の気持ちでいっぱいです。

実際に自治会長をやってみて、とても大変だった反面、本当に楽しくて人生の勉強になり、私自身をとっても成長させてくれるいい体験になりました。また、人への感謝の気持ちを大切にしようとも思いました。

私は将来教師になりたいという夢があります。その夢を叶えるために宮崎県南九州大学へ二年次編入することになりました。「高校卒業後すぐ、南九州大学に行ったらよかったのにな」と言われたことがあります。しかし、最初から南九州大学に行っていたら、自治会長をすることもなかっただろうし、やさしくしてくれた先輩や、毎日大笑を起してくれる同級生や、いつも

笑顔で話しかけてくれる後輩やユニークでやさしい先生方と出会うことはなかったと思います。

「人との出会い」これが生きていく上で、いかに大切かをこの徳島農大にきたことでより知ることができました。また私自身も成長することができ、前なら出された課題や作業をやり遂げずに諦めてしまうことが多くありましたが、自治会長になってからは途中で諦めそうになっても最後までやり抜く力を身に着けることができました。

私が将来教師になった時、農業のこととはもちろん人との出会いの大切さや夢を持つことの大切さを教えてあげることのできる教師になりたいと思います。

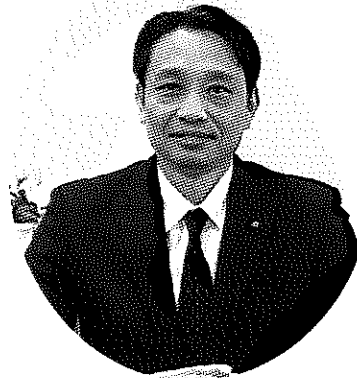


農大祭で名司会

ピンチをチャンスに!

徳島県立農林水産総合技術支援センター

農業大学校校長 小川 純 一



けた「実践力」を武器に実社会の農業現場や関連産業での活躍を期待します。一年生は、来る目のために更なる実践力と人間力を身につけることが大切です。

さて、平成二十七年度の農業関係の大きなニュースといえば、TPPの大幅合意があげられます。TPPはアジア・太平洋において「一つの経済圏」を構築する協定で、世界のGDPの約四割、人口の一割強(八億人)を占める巨大な経済圏が誕生します。

物品関税だけでなく、サービス・投資の自由化を進め、さらには知的財産、電子商取引など幅広い分野で新しいルールが構築されます。

農業大学校二年生の皆さん、無事に課業を終了し、いよいよ実社会へ巣立って行かれること、心よりお喜び申し上げます。二年間という短い期間ではありますが、多くの知識や技術を学ばれ、経験されたことと思います。各農業大学校とも、実践教育を重視し、専攻演習や実習、そして農家での体験学習などを通じて、農業技術や経営の一端を学ばれたことでしょう。

大学の農学部での実践学習に較べて、勝るとも劣らない内容ではないかと思えます。皆さんが農業大学校で身につ

農林水産業分野では、関税の撤廃や輸入量の制限緩和などで外国産の安価な農林水産物の輸入が増大することにより、国内産物の価格が低迷することが予想されます。日本全体の生産減少額は千三百〜二千億億円になると試算されています。このように、貿易の自由化、グローバル化によって日本農業

は大きく影響を受け「ピンチ」に至ります。

政府では、TPPで大きく影響を受ける米、牛肉、乳製品などの重要五品目については「経営安定・安定供給のための備え」の対策を講じるようです。また、「攻めの農林水産業への転換」を重点施策として、高品質な国内産物を輸出するなど需要フロンティアの開発などに取り組みます。

さらに各自自治体においても独自の取り組みが示されるでしょうが、革新的な農業者は、この機会を活用して、ドラスチックに経営を変革する事で「ピンチをチャンス」に変えていく事ができるのではないのでしょうか。

今春、社会に出られる皆さんは、よりアンテナを高くして、これらの情報を的確に把握して、より高品質の農産物の生産や加工品の開発に取り組みなど、ご自身の農業経営や就職先の業務で活躍を期待しています。

一年生は、六次産業化や農産物の輸出に適する栽培方法などについて勉強することも必要でしょう。

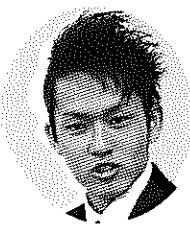
TPPは、日本の農業にとって、「ピンチ」ではありませんが、若い皆さんの発想と努力で「チャンス」に変えてください。

終わりになりますが、徳島農大校歌の歌詞にあります「・・・農こそは国の基(もと)とい」と 旗じるし雄々しく掲げ 技能磨かむ若人われら・・・」の精神で活躍されることを祈念します。

愛媛農大の誇れるところ

愛媛県立農業大学校
総合農学科 二年 農産園芸コース
愛媛県立農業大学校学生自治会長

日野 公喜



今年度の四月より、私は愛媛県立農業大学校の自治会長に就任しました。自分自身、学生をリードしていくことは初めての経験であり、まだ会長となつて間もない頃は、色々な方にお世話になったことを覚えていています。

自治会が主体となる活動のうち、力を入れていた活動は大きく三つあります。一つ目は高校生を対象とした、一泊二日の就農啓発講座です。今年も沢山の高校から参加があり、食事会や意見交換などを行いました。私は今年度と昨年度の食事会、意見交換に参加しましたが、今年度は自治会長を任せられたので積極的に会話をすることを覚えていています。また、私たちが普段生活している学生寮に一晚泊してもらい、実際にどのような環境で過ごしているのかを体験してもらいました。

二つ目は、四国農学連スポーツ大会です。愛媛農大は毎年、それぞれの部で優秀な成績を収めてきましたが、今年度は野球、バレーボール、バトミントン、



四国農学連スポーツ大会4種目制覇!

卓球の四種目すべてで優勝することが出来ました。これは、学生が一丸となって練習に取り組み、また応援に取り組んだ成果であると大変喜んでいきます。

三つ目は、農業大学の目玉とも言えるイベントである収穫祭です。毎年、多くの方々に来校していただいております。来ていただいた方々に喜んでいただけるよう心掛けました。愛媛農大のアイドルであるヤギを登場させたり、小学生までを対象とした「ちびっこスタンブラリー」を開催したりと、子どもたちも楽しめるコーナーを設けました。大人から子どもまで幅広い年齢層に楽しんでもらい、私たちの活動を地域の方々に知ってもらえたのではないかと

思っています。

愛媛農大は北海道士別市の農家さんと結びつきがあります。毎年、一年生が二班に分かれ六月と九月に北海道士別市に行きます。そこでは、農家さんの家で二週間泊まり込みの実習を行います。畜産農家のところで実習をしていた人は、毎朝四時に起きて作業を行っていたそうです。実習が終わり、皆が口を揃えて言っていたことは、とにかく土地がハンパないということでした。そうです、確かにハンパないんです。何人かの農家さんが所有している土地は、一〇〇haを超えています。そして、この北海道研修は今年で記念すべき五十周年を迎えることが出来ました。毎年、我が校で開催している収穫祭に北海道士別市の農家さんに来ていただいています。今年も北海道研修五十周年ということもあり、例年より多くの農家さんに来ていただきました。そのおかげで収穫祭は大盛況となりました。北海道士別市の農家さんをはじめ、卒業生の方々にも大変お世話になりました。ありがとうございます。

今年度を振り返ってみると、月日の流れをとっても早く感じるとともに、自治会長に就かせていただき、充実した毎日を送ることが出来ました。自治会長になり、様々な問題に対して色々な方々に支えられ、成長できたのではないかと思います。まだまだ未熟なところがあり、迷惑をおかけしたこともありました。愛媛農大で学生自治会長

をやった良かったと思っています。皆さんありがとうございます。

自治会長には、これまでの会長達の思いを受け継いで頑張りたいと思っています。最後になりますが、これからも全国の農業大学校並びに愛媛県立農業大学校の発展を強く願っています。

私の目標

愛媛県立農業大学校
総合農学科 一年 農産園芸コース

加藤 明子



私の家は農家で、幼い頃から農業に触れる機会が多々ありました。小さい頃は土に触るのが好きで、田んぼについて行っていましたが、大きくなるにつれて「いつ終わるのだろう」とばかり考え、嫌々手伝っていました。家族が仕事をしている姿を見て、「とても忙しそうだ」、「手間がかかり重労働な上に病害虫による被害もあり、天候の影響を受けてとても難しそうだ」と、農業に対してあまり良いイメージはありませんでした。

しかし手伝って行く中で、種まきして発芽した時に小さな喜びを感じたり、世話をすることによって育っていく様子を見て嬉しさを感じたり、野菜を収穫する時の喜びを肌感じたりしました。

た。

自分たちが丹精込めてここまで育ててきたという達成感や充実感があり、農業は大変だけれど、それ以上に魅力があるのだと思いました。そう思うようになって、農業についてもっと学びたい、農業大学校で栽培技術や農業経営に関する知識を身に付けたいと思うようになりました。更に、農業大学校出身の姉の友人や後輩が家の農作業を手伝いに来てくれた時、みんなが楽しそうに学校での生活や実習の出来事、寮の様子などをたくさん話してくれたことも農業大学校入学を決めた大きなきっかけでした。

しかし、高校は普通科だったため、農業に関する専門的な知識が全くなかったため、このような私が農業大学校でやっていけるのかとても不安でした。

実際、入学してしばらくの間は、専門用語の多い講義や実習に苦労しました。実習では、いろいろな野菜に触れましたが、収穫の仕方や腋芽取りも初めてで、最初はどうすればいいのかわかりませんでした。先生や実習助手の方に教えてもらいながら、少しずつできることが増えていきました。

種まきから管理、収穫、出荷調整、販売までやってみて、学校では大勢が分担して作業していますが、一人で何種類もの野菜を管理するとなると、とても難しいと感じました。しかし、自分が種をまいた野菜がどんどん成長し



イチゴのハウスにて

ていく様子を見て、成長の速さに驚きました。それと同時に愛着がわき、心が温かくなりました。実習も授業内容も初めての事ばかりで、いつも先生や先輩、友達に教えてもらってはかりで迷惑をかけていますが、わからないことをわからないままにせず、理解できるまで努力し、苦手なこともなるべく早く克服し、農業をするために必要な知識を一つでも増やし、卒業するまでに少しでも大きく成長したいです。

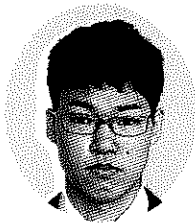
将来私は、農業をするつもりです。現在、家では新テッポウユリを中心に、米、麦等を栽培しています。ユリはお盆とお彼岸の時期がピークなので収入が八〜十一月に限られます。私が就農したら、それ以外の月にも収入が得られる野菜を栽培することを目標としています。どんな野菜が適しているのか、利益になるのか、しっかり学び

たいと思っています。あと、食べず嫌いの人にも「この野菜なら食べられる」と言ってもらえるような野菜を作りたいと思っています。知人が「最近スーパーで売っている野菜は野菜本来の味がしないような気がする」と言っていたので、品種や肥料を工夫して野菜そのものの味を活かした野菜づくりをしたいと思っています。

農業を営む決意と計画

愛媛県立農業大学校
総合農学科 一年 果樹コース

喜井 足 道

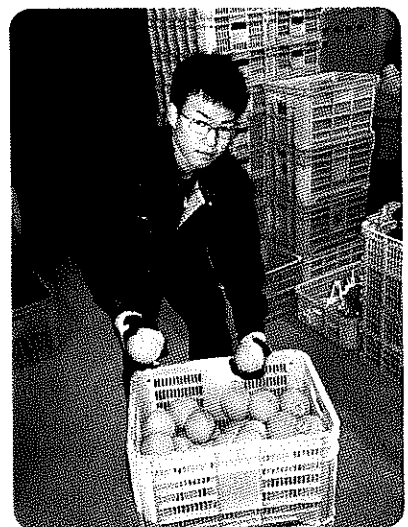


私が非農家出身でありながら、農家を志すきっかけは、簡潔に言えば自由が欲しかったから

す。私は普通に就職してしまえば、社会という檻に閉じ込められてしまうと小学生ながら感じてしまい、その未来に怯えながら自由を強く求めるようになりました。そんな時に農業体験をさせてもらい、そのときの受入農家さんが言った「農業は自由の職業だ」という言葉に強くひかれ、農家になることを決意しました。

このことを親に相談すると、少しも反対されませんでした。後から聞いた話ですが、親いわく「子供の頃の夢だ

から、すぐに変わるもんだと思っていた」とのことでした。また、友人達にも話してみたのですが、「喜井くんっほいんやない」とか「農家になつたら作ったもん送ってきてや」と言ってくれました。私が思っていたより反対されないで、当時は驚きました。



柑橘の選別作業の様子

それと同時にうれしかったため、その友人達に「任せとき、うまいもん作ったるけん」と、今思うと少々無責任な返答をしたことを覚えています。しかし、作りたい気持ちに嘘はなかったですし、私の作ったもので喜んで欲しいとさえ思っていました。

そこで、親が協力してくれるときが来るまで、農家になりたいと親に言い続けることにしました。六年間ほど言い続けた頃、さすがに私の気持ちに本気だと思ってくれたようで、私のために農地を確保してくれました。その農地は松山市の沖に浮かぶ「興居島」というところです。興居島は四国本土から約1km離れた離島で、人口約一〇〇人、うち高齢者五割以上の限界集落です。面積は約八・五平方km、

主な農産物は柑橘、桃です。特に柑橘の栽培は松山市ではトップクラスです。というのも、興居島は海に囲まれているため、潮風により、柑橘が甘く育つからです。

さて、農地は確保できました。次に、私が農大を卒業して就農したら、その

興居島で何をしたいのかを考えなければなりません。まず、今は五十haしかない農地の拡大と柑橘栽培品目の増加に努めたいです。それから、助け合ったり、競争したりする仲間がいたほうが作業が楽しくなるので、仲間作りをしたいです。加えて、加工品づくりにも力を入れます。私の友人に、高校で調理科で学んだ人がいるので、その友人に協力してもらい私が栽培した柑橘などを使ったオリジナルの加工品を作りたいと考えています。

これらを実現するために、私が今やるべきことを考えると、まず農大で柑橘栽培に必要な接木、剪定といった基本的なことの他に病害虫の知識や、先進農家の熟練した技術などを身につけたいと思っています。さらに、野菜ソムリエ資格の勉強をし、野菜や果実に関する知識を深めようと考えています。

次に、農地を拡大するために、高齢者が手放した土地を譲ってもらうと

粘り強く交渉し、最終的には2hくらいにしたいです。また、仲間作りに入って活動したいと考えています。その組織で、先輩たちの工夫や技を聞いて、自身の農作業に活かしてみたいと思います。最後に加工品作りですが、前述したように加工に携わる友人がいますので、地域の特産品を使った加工品の開発をしたいと考えています。

私はまだ、農業の一般常識ぐらしか理解できていません。ですが、農大卒業後は、地域の後継者・担い手として、農作業や組織での活動に励むだけでなく、他の道に進んだ友人たちとも手を取って活動したいと思います。その「理想」を「現実」のものにするために今は、努力を惜しまず、何事にも全力でぶつかっていききたいと思っています。

消費者の顔の見える 柑橘経営をするために

愛媛県立農業大学校

総合農学科 一年 果樹コース

菊池 崇 雅



我が家は清見やデコボンなどの中晩柑類を中心とした柑橘を栽培しています。私が小学生の頃は両親を手伝い、柑橘の収穫作業

を行っていました。一生懸命、農作業に励んでいる両親を見て私の中に将来、農業をしていこうという気持ちが少しずつ膨らんできました。こうした日々を過ごしていく中で、私にとって人生の分岐点となる高校・大学選択の時期を迎えました。

この時、私は将来、地元で農家として柑橘栽培をしていきたいので農業科目のある川之石高校、そして農業が専門で実践の勉強ができる農業大学校に進学しようと決心しました。両親に相談したところ、農業で生活していくのは大変で、苦労することが多く、あまり賛成してくれませんでした。しかし、それでも私は「自分で農業をしたい」「おいしい柑橘を作りたい」といった自分の気持ちを根強く伝えたことで両親は賛成し、次第に応援してくれるようになり、農業系の学校に進学することができました。

私は将来、柑橘栽培をしていくことを考えていたので、果樹コースを専攻しました。農大の果樹園では、デコボンや清見といった中晩柑類の他に、愛媛県のブランド品種である紅まどんな・甘平等さまざまな品種が半年の長きにわたって収穫・出荷されています。

生産物の販売については、高校の時に宅配で、農大では直売で消費者と直接触れ合う販売を体験しました。この販売体験の中で、このようなことがありました。「毎年おいしいミカンがあ

りがとうございます。今年もよろしくお願いします。」といった消費者の温かい言葉を耳にしたのです。その言葉を聞いた私は、「自分たちがしていることで人が喜んでくれる。」と改めて農業のすばらしさを感じるようになりました。

これまで収穫・摘果など、作物と向かい合うだけの単純作業でしたが、農大の直売で直接、消費者と触れ合うことにより、私は農業には作物を育てるだけでなく、人と触れ合うことによる喜びもあることを知りました。そしてこのことを契機に私は、「消費者と触れ合える柑橘経営。消費者の顔の見える柑橘経営。」に取り組みたいと思うようになってきました。

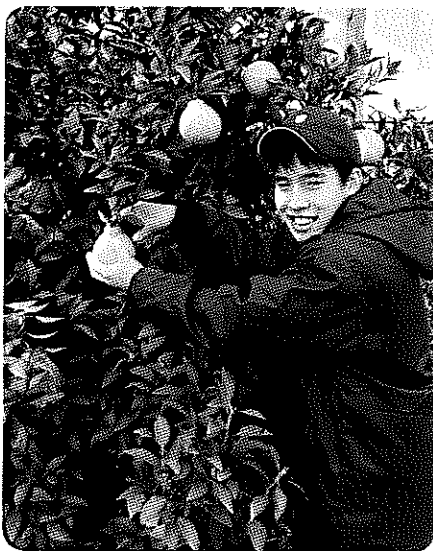
ただ、そのためにはクリアしなければならぬ課題がいくつかあります。その一つ目は、消費者ニーズの高い有望品目を導入することです。次に、安全・安心な農産物を求める

消費者に応えるため、化学肥料・農薬を使わない有機栽培や減農薬栽培にも取り組んでいこうと思っています。

さらに、経営を安定させるためには収益の変動を少なくし、価格決定権を生産者が持つ必要があると思います。このことに関しては、市場を通す従来の流通体系では改善が難しいため、直売やインターネット販売など、消費者と直接触れ合う販売に取り組むことで、これが可能になると思っています。

このような私の目指す農業経営を実現するため、私は農大でさまざまなことを学んでいかなければなりません。柑橘栽培の基本はもちろんのこと、市場や地元直売所での販売方法、インターネットを活用した直接販売方法でのメリットやリスクについて、さらに消費者ニーズの把握方法や有望品種の栽培方法についても勉強していきたくと思っています。

なお、消費者の顔の見える柑橘経営をしていくためには、コミュニケーション能力を向上させることが重要だと考えられますが、これが私にとって最も難しい課題です。卒業までの残された時間で、これらのことを積極的に学び、就農後は農大で得た知識や実習での経験を十分に活かして頑張りたいと思っています。



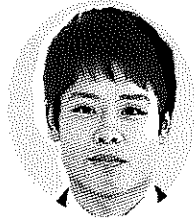
デコボン収穫作業

農大での幸せな二年間

高知県立農業大学校
畜産学科 二年

高知県立農業大学校学生自治会長

大久保 凌兵



私の実家は高知県の嶺北地域というところがあり、土佐あかうし繁殖・肥育一貫経営、土佐

ジロー卵の生産、および水稲栽培を行っている。嶺北地域は高知県の中でも畜産業が盛んな地域の一つです。そこにはたくさん畜産農家さんがいて、お互いに助け合いながら経営を行っています。

私は小さい頃から牛を見ていたことあつてか、いつしか気が付くと実家の畜産業を継ぐことが目標となっていました。そこで、実家で飼育している牛と同じ品種である『土佐あかうし』について学ぶことができる高知農大への入学を決めました。

思い返してみると農大での二年間はとても楽しく、人生の宝になるような経験や友達を得ることができました。

まず初めに、入学当初は学校生活もそうですが、中でも実習作業への不安が一番大きかったです。というのも家に牛はいましたが、部活や遊びを理由に全くと言っていいほど手伝いをしな

かったからです。ところが、いざ実習に入ってみると最初に抱いていた不安感は消え、牛との触れ合いによって刺激のかつ楽しく充実したものへと変わっていききました。実習を重ねていくにつれて私の中で牛への愛情は大きくなっていき、もし「一番好きな動物なに？」と聞かれたら迷わず私は「牛！」と答えます。しかしながら、実習を通して牛の可愛いところばかりを見てきたわけではないと知るところのほうが多かったです。牛の屠畜・解体を見ることもありました。これらの経験をしても私は牛が好きです。はかなくも若くして屠畜されてしまう牛達。私はその短い一生をとにも連れ添い、愛情を注ぎ、少しでも「この人のもつと飼ってもらえてよかった」と牛に思ってもらえるような農家になりたいと思っています。

次に、学校生活についてです。農大で出会った友達と「将来は農業をやりたい」という最終目標が同じだったためか、仲良くなるのに時間はかかりませんでした。一年生の時の寮生活は今となってはとてもいい思い出です。私は寮というものが人生初体験だったので慣れるのに一か月ほどかかりました。しかし慣れてしまうとこっちのもので、点呼や消灯で時間が制限されるといところを除けば、毎日友達と一緒に生活できる寮生活というのは人と関わる事が大好きな私にとって最高の環境でした。まだ若い私達が消灯の二十三時に寝られる訳もなく、夜遅くまで話をしたりして、時には舎監さんに叱られることもありました。今思うと舎監さんに「迷惑をかけてすみませんでした」と謝りたいです。



よさこいの思い出

一年生の一月に、新しい自治会役員の投票があり、なぜか私が自治会長に選ばれました。いい加減な性格の私にこんな大役が務まるのかとても不安でした。しかし自治会のメンバーがサポートしてくれたおかげで農大での様々なイベントも成功し、任期終了まで無事に務め上げることができ本当に良かったです。自治会長になって経験したことは卒業後の大きな力になると思っています。

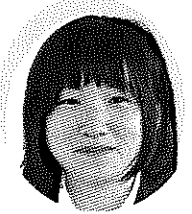
農大で得た友人とは二年生になって寮から出た後も遊ぶ頻度は変わりませんが、毎日が誰かのアパートでお泊り会

です。寮生のときは遊びの話ばかりでした。今は気が付くと将来の夢や、農業に対する思い・考えについて夜な夜な熱く語り合っています。

オランダ研修に参加して

高知県立農業大学校
園芸学科 花き専攻 二年

小松 美 由



私は、平成二十七年十一月十三日〜二十七日までの二週間、澤田君と一緒にオランダ研修に

参加しました。私が参加した目的は、世界では園芸農業がどこまで進んでいるのかを知るために先進的なオランダの農業を実際に見て学びたいと思ったからです。また、海外の生活や文化などにも興味があり実際に体験してみたいと思っていました。



ヘンク先生宅にて

私は、海外旅行の経験もなく事前の知識も少なかったため、オランダに行くの連続でした。例えば、日本の農業は育苗、定植、収穫等ほとんどの作業が手作業で行われていますが、オランダでは機械で行われています。多くの企業を視察した中で私が一番印象に残っているのは、ピヨンド社です。育苗培土を機械で混ぜ合わせ成型し、その後キクの挿し木マシンで挿し木を行うといったように、挿し木苗を作る場所には従業員は一人もおらず、全て自動で行われていました。ハウス内も定植機や耕耘機が通れるように通路はコンクリートで広く作られており、収穫したキクがコンベアで地下を通り調整場に運ばれるようになっていました。そして、九ヘクタールのハウスを栽培しているにも関わらず、従業員はわずか十人程度と聞きとても驚きました。

た。視察した他のどの企業でもこのように機械化によって効率よく生産されており、それはまるで工場を見ているかのようでした。オランダは農業生産技術だけでなく、農業に関わる機械やコンピュータ等の技術も優れていることがわかりました。背景には人件費の高さもあるようですが、生産者と企業が連携しているからこそこのようなシステムができるのだと思いました。また、オランダの農業は環境についても考えられており、天敵を使った栽培をしたり、夏の温風、冬の冷気を地下に溜め冷暖房に用いたりしているそうです。さらに、海外を相手に農業をしているため、母国語はオランダ語ですが英語をとっても重要だと考えていました。学校の授業によっては全て英語で行われることもあるそうです。このように日本との大きな違いを知り、国土も狭く気象条件も厳しいなかで、先進技術の発達や世界第二位の農業輸出国となっていることに感銘をうけました。

オランダ人は、普段はとても親切で寛容な方ばかりでした。そして、授業や仕事になると積極的に熱心に取り組み、メリハリもしっかりとついています。また、行動力も優れていて、生産して効率が悪いと思えばハウス内を改良したり、道路にある信号機を除きサークルにするなど、日本人では躊躇しそうな規模の大きいことまでしていました。このようなオランダ人の

性格に、私も学ぶべきところがたくさんありました。私は、今回初めて海外に出て視野が大きく広がりました。世界にはまだまだ私の知らないことがたくさんあると実感し、さらに海外についての興味も湧いてきました。この研修を機に、一人で海外旅行やワーキングホリデーにも行ってみたいと思いました。今しかできないことに、もっともつと挑戦していきたいです。たくさんの人に出会い、生活し、オランダのことが好きになりました。また、海外に出たことで日本の素晴らしさを改めて感じ、日本人であることを誇らしく思い、今まで以上に日本が好きになりました。今回の研修で学んだたくさんの方のことをこれから的人生に生かしていきたいです。

オランダ留学研修で学んだこと

高知県立農業大学校
園芸学科 野菜専攻 二年

澤田 一生



私はオランダの先進的な栽培技術やオランダ農業の実態を学びたいと思い、オランダのウエ

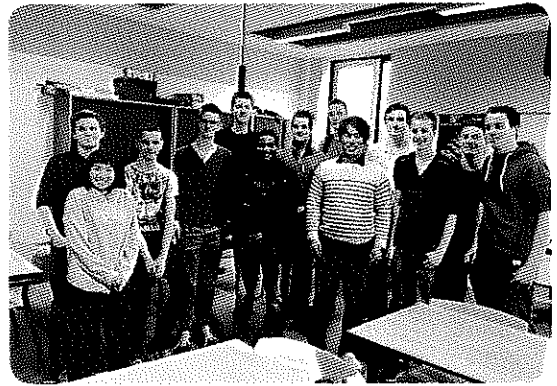
ストラント市で約二週間の研修をさせて頂きました。この研修では本校と交

流しているレンティス校の授業に参加する形で生産会社や農業関連会社などの見学をさせて頂き、貴重な経験をすることができました。また、多くのオランダの方と交流をすることもできました。

今回の研修を経て特に感じたことは、まず高知とオランダの農業体系の違いです。オランダの生産会社では広大な高軒高ハウスの中で栽培を行っています。温室環境や灌水の管理、品質チェック等はコンピュータで行い、定植やベッドの移動、収穫から出荷までの調製ラインなど様々な作業工程が機械によって自動化されていました。このため、どの会社も少ない人数で農業を営んでいます。私は高知で普及している温室栽培との違いに圧倒されました。そして、そのような機械によって自動化された栽培体系を実現させたからこそ、オランダ農業は非常に省力化と規模拡大が進み、また、農業機械等を開発・製造する農業関連会社が発展したのであると感じました。

高知では農作業は手作業で行うのがほとんどであり、機械やコンピュータを導入したオランダ型農業が取り入れられているのはごく一部です。これからオランダ型農業の導入が進み、高品質を維持しつつ増収や、省力化が実現できて農業人口減少の対策となっていくのではないかと思います。

次に、生産者を取り巻く環境です。私は、ウエストラント市では農業関連



レンティス校で交流したピート副校長のクラスの学生

会社が生産者と強い連携を持っていると感じました。ロイヤルプリンクマン社では世界各国の様々な農業用資材が揃えられており、生産者はここに來れば栽培に必要な資材がほぼ全てに入るようになっていました。グリーンQやプリヴァ社では研修やコンサルタント業を行うなど生産者の育成を助けていました。また、行政は助成金で生産者を援助することはせず、冷暖房用水や二酸化炭素のバイプラインの設置、土地の集約化、販売ルートの開拓などに力を入れ、生産や流通に関わる環境を整えることによって生産者をビジネスに導いていくという取組を重要視していました。私はオランダ農業が生産者だけでなく、農業関連会社や行政などと一体となって支えているということを実際に見聞きし、感銘を受けました。

日本の生産者は小規模な農家がほとんどだと思っています。家族経営をするにしても農業生産法人化などを進めていくべきではないでしょうか。また、生産者の規模拡大や技術革新、農業ビジネスを発展させていくためには行政や農業関連企業、研究機関などの協力が不可欠ではないでしょうか。私は今の生産者を取り巻く環境から少しずつでも変わっていく必要があるのではないかと思います。

最後にオランダでの研修では、ピート副校長やヘンク先生、そのご家族など、現地の方々に非常にお世話になりました。日本の進んだ耐震技術のように、オランダで発展してきたウォーターマネジメントという治水に関する学問について博物館などを巡って教えて頂きました。マーケットでのショッピングやご自宅のデイナーに招いて頂くなどして、オランダ人の生活風景や食文化を体験することができました。また、レンティス校の生徒たちとお互いの国の文化の相違点などを話題に交流することもできました。

私は異国間の交流をすることで文化や考え方などお互いの相違点を学び合うことはとても大切で自分の為になることだと感じました。私の不得手な英語力でもオランダ人と交流することで、彼らの大胆な行動力や効率性を重視した考え方、様々なものから学ぼうとする強かな向上心などを感じるようになりました。彼らの人間性から学ぶべき

ものが沢山あると感じました。私は機会があれば再びオランダに行ってみたいと思いましたし、来年オランダに行く後輩にもそういったことをぜひ学んで欲しいと思います。私は卒業後、オランダ型農業を取り入れた農業生産法人に就職します。今回の研修で学んだことを活かしながら、卓越した栽培技術を持つ生産者になれるように頑張っていきたいと思っています。

中山間地域の魅力ある農業を目指して

高知県立農業高等学校

園芸学科 果樹専攻 一年

山本 礼乃



私の出身は高知市の北部にある旧土佐山村という中山間地域です。私が小学生の時に合併し

より村から高知市に変わりました。土佐山地区は古くからユズが栽培され、栽培面積は五十九ヘクタールと県内第四位の産地となっています。また地元ではユズ栽培の他に露地野菜、施設野菜、四方竹等の四季折々の産物があります。

この地区は十月が最も良い季節であり、学校への通学路、ちよっと歩くだけでも紅葉にまぎれ、ユズは黄色く色

付き始めます。この季節からユズの収穫準備と並行して四方竹の収穫が始まります。四方竹とは秋頃に収穫する地元でも親しまれている食材です。

私の家はユズや四方竹などを栽培しており、面積は少ないですが今はユズに力を入れ始めています。私はこの先のことを考えて専門知識や技術を身につけようと農業高等学校に入校しました。地域では昔はユズの収穫期など繁忙期になると地元住民が人を紹介しあう、あるいは自分の家の若い人を手伝いに行かせるなどお互いが助け合いながら作業を行っていました。しかし、最近ではそうした労働交換もめっきり減ってきています。原因は地元農家の高齢化です。数年前から地域外に出て行く人が増え、私の同級生も既に半数が地域外に就職しています。そのため農業を継ぐ人、それを手伝う人が年々減っているというのが地元で大きな問題になっています。収穫期になれば重たい荷物を運ばなければならぬので、力のある若い人がいないというのはとても辛いものがあります。

ところが、最近では嬉しいことに「地域外から農業をしたい、農業に関わる仕事がしたい」という理由で地元に移住してくれる若い人などが増えていきます。しかし、地域の人と接する機会が少なく、せっかく移住して来た若い人の力を地域全体として十分に活かせていないように感じます。

私は工業高校デザイン科を卒業し、



果樹科全員集合

地域デザインというものを学びました。地域デザインとは「地域が抱える様々な問題をそこに住んでいる人たちが自身がコミュニティを作り、しっかりと向き合うことで自分達自身が問題を解決していく」そんな持続性があるしくみを作っていくためのデザインのことです。

私は、卒業後、地域デザインの手法を使って、私が学んできた知識や技術、地元の農家、そして移住してきた方々と共に、それぞれの能力を活かして、魅力ある農業を核とした地域を作りたいたいと思っています。こうしたことを実現するために、今、自分がしなければならぬことは農業大学校でしっかりとユズの栽培技術を身につけることだと考えています。今後、農業大学校では、こうした技術を学ぶためプロジェクト

活動として、「ユズの品質向上」に取り組んでいきます。

私が農業大学校に入校して考えたこと

高知県立農業大学校
園芸学科 野菜専攻 一年

結 城 武 彦



私の実家は水稲を栽培しており、中高生の頃は水の管理や稲刈りなどの手伝いをしていま

た。大学時代を東京で過ごし、そのまゝ、サラリーマンをしていきましたが、自ら経営を組み立てることができない農業に魅力を感じたことや高齢となった両親も心配であったことから、実家での就農を決断しました。

当初はUターン後即就農をしようと考え、地元との農協に相談したところ、農協からは露地オクラの栽培を勧められました。栽培には技術や知識が必要だと教えてくれました。そこでオクラの栽培技術だけではなく、農業全般の基礎を身につけるために農業大学校に入校しました。

高知県でのオクラ栽培は、トンネルや水枕を活用した露地栽培と私がプロジェクト課題として選んだハウスキュウリの後作栽培が多く、現在、私は前

作のキュウリ栽培に取り組んでいます。実際にキュウリを栽培するまでは、ある程度手間をかける必要があると覚悟をしていましたが、いざ自ら栽培してみると、作業が間に合わずに果実が多く着いてしまい枝が折れる、病気を見逃して広がらせる、果実が水たまりに

あたり腐ったり、地面について曲がるなど、想像していた以上に大規模で栽培を行うことの大変さと、人並みの収量や秀品率を確保することの難しさを日々実感しています。特に、アザミウマが媒介するウイルス病「黄化えそ病」が発生し、せっかく大切に育ててきたキュウリを健全株に伝染させないために毎日引き抜かなければならないことは残念でなりません。また、病気の診断では農業による葉害をウイルス病と間違えて抜き取りそうになったこともあり、一人前の技術を身につける道のりは長いと感じています。

私はプロジェクトで5aのハウスを管理しており、キュウリの出荷が始まっていますが、十一月末時点で二十万円にも届いていません。経営を始めた場合、この粗収入から肥料や農薬の経費を支払い、税金も申告するのだと考えるとあまりの大変さに心が折れそうになることもあります。

入校当初は実家周辺の土地を集約して中核的な農家になる計画を持っていました。実際に圃場のある周辺の農家の方から農大卒業後に作らなくなった農地を代わりに作って欲しいと申し入

れされた事もありました。しかし、栽培の現実を垣間見て大規模に農業をすることの難しさを身を以て知りました。私は三十歳代なので卒業後は実家では即戦力になることが求められ、日々の生活が待っています。実家周辺は中山間地域なので、一つの圃場面積は小さく、形は不ぞろいで、管理するうえで

条件の悪い圃場が多くあります。夏場には一日中草刈に追われることもありますが。決して農業のしやすい地域ではありません。そのため、闇雲に農地を広げてもその後の管理ができません。ただ、私は野菜を作り販売する喜びを知り、やりがいいと感じました。農業は続けていきたいので、当初の目標は少し先延ばしにし、まずは食べていけるだけの農業経営ができる技術を習得しようと思います。実家のある香美市では春菊とオクラをワンセットで周年取



キュウリを一緒に作っている仲間達

獲するようにしているようで、上手に作るとハウスで反収四百万程になるそうです。まずはそこを目標にしたいと思います。

三月からは、当初に勉強したいと思っていたオクラの栽培も始まります。栽培技術をじっくり勉強するチャンスはこの一年だけだという危機感を強く持ち、いろいろなことを試験し、現場視察も可能な限り行い、厳しさに負けない強さを身につけ、卒業したいと思っています。

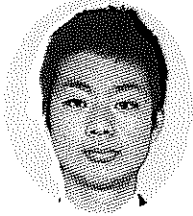
ゼロから農業を

学んだ一年間

香川県立農業高等学校

野菜園芸コース 一年

北 尚 也



私が香川県立農業高等学校の野菜園芸コースに入学してから約一年が経とうとしています。私

は、高校は高松市内の工業高校に進学し、電気系の学科を専攻していたので、在学中に電気系の資格を取得して就職しようと考えていました。ところが、三年生の六月に進路を決めることに迷っている時に両親や祖父に相談したところ、勧められたのがこの農業大

プンキャンパスに参加してみて、コースの先輩が丁寧に教えてくれたり、また自然の中で実習ができることに魅力を感じて、この学校に入学することに決めました。

入学当初は、工業高校出身のため農業について全く知らず何もかもがゼロからのスタートでした。勉強面では野菜についてだけでなく、いろいろな専門科目の講義がありました。土壌肥料や植物防疫、農畜産概論や園芸作物概論、農業経営を学びました。自分にとっては初めて学習することばかりで戸惑うこともありましたが、苦手意識を持っていて専門科目も学校の先生や同級生の友達に教えてもらったりしながら理解することができました。

また、農業高等学校の先生以外の講義もあり、外部の先生や農家の皆さんの貴重な体験談を聞ける実践講話もありました。これからもいろいろな話を聞いて実習でも活かしていきたいと思っています。また、前期の講義では英語と体育もありました。英語を学習することは将来海外の人と関わる時に必要だと思いました。

農場実習は週三回あり、使い方がわからなかった道具の名前や用途を先生や先輩に教えてもらいながら覚えていきました。初めの実習は除草から始まりました。農業をする上で除草作業は重要なことだと思いました。また、歩行型の畝立て機を使って畝立てをしました。畝立て機を使うことに慣れていな



農家実習での作業

かったので、真つすぐに進むことができずに畝がガタガタになってしまいうこともありました。他にも摘心、芽かき、中耕土寄せ等、いろいろな実習がありました。苦手な作業もありましたが、回数を重ねるにつれてできるようになりました。夏季休業中は五日間学校に登校して実習をしました。午前中に収穫して昼の直売に間に合うように荷造りをしました。二年生になると七日間になるので、頑張りたいと思います。

後期からは農家実習が始まりました。私が実習をさせていただいた農家は、イチゴとキュウリの栽培をしています。実習先では学校で行っている作業と同じような事もありましたが、農家でしか学べないこともたくさんありました。実習先では収穫から出荷までさまざまな事を体験しました。イチゴや

キュウリの管理など大変な事もありますが、これを怠ると取量に影響が出るので、農業を経営する事は大変な事だと実感しました。

あと二カ月くらいで二年生になるので、今年卒業論文と就職活動の二つを頑張っていきたいと思っています。

農大に入学して学んだこと

香川県立農業高等学校

花き園芸コース 一年

大 西 達 也



私が農業大に入学して、早や一年が経とうとしています。私が農業大に入学しよう

決めたのは、自分も綺麗な花を育ててみたいと思ったからです。しかし、私に通っていた高校は、農業高校ではなく工業高校だったので、初めは工業大に進学しようと考えていました。進路に悩んでいるときに母親から農業大のオープンキャンパスに行ってみないかと言われて、参加しました。そこで花き園芸コースの花を見た時に自分もこういう花を作ってみたいと思いい、進学を決めました。

私の家は、米麦と野菜を作っている兼業農家で小さいころから両親と一緒に出植えや稲刈りなどの作業をしてい



カーネーションの定植作業

たので、農業に関しては多少の技術や知識はありました。なので、ついでにけると思っていたのですが、全くついでにけず慣れるまで大変でした。他にも、農業大学校に入学してからは農業の基礎的な概論や農業経営、農業簿記など様々なことを学ぶことができ、とても楽しい日々を過ごしています。学校生活を通して、あらためて農業の大変さや難しさを感じ、自分はまだ未熟だということを感じました。

八月には四国地区の経営発展セミナーに参加する機会がありました。二泊三日という短い時間でしたが、得るものは多く、マーケティングに関することなどを学び、改めて将来について考えることができました。また、十月から十二月にかけて十五日間、花き農家へ農家実習に行きました。私が行っ

た農家の方は、草花を生産していて、高い栽培技術やハウス用の自動巻き上げ機を使い、高さを自由に無段階で変えられる作業機を自作するなど、優れた方でした。そこでの作業は、主にリキュウソウやアストラランチアなどの切り花の収穫、出荷調整やビニールハウスのビニールの張替えなどをしました。また、十一月には実習先の農家の方が「四国の花 商談会」に出るということで一緒に参加させてもらう機会がありました。そこでは市場や仲卸、バイヤーといった方たちも来場していて、いろいろな情報を聞いたり、他の農家の人から、自分のこれからのことについてのアドバイスをもらうなど、とても勉強になりました。実習先の農家の方からは、花の栽培方法だけではなく、実際に就農した場合にしなければいけないことなど、多くのことについて教えてもらい、短い時間でしたが有意義な経験ができたと思います。二年生になると専攻実習が始まりますが、今のところ、農家実習と同じ農家へ行く予定であり、ここでは、前よりも詳しく栽培方法やハウスの建て方など、多くのことを学びたいと思っています。その他にも、四国地区農学連スポーツ大会などの行事がありました。私はバレーボールの試合に出場しました。バレーボール経験はなく、入部当初は何もできませんでしたが、練習するうちに少し上手になった気がします。今

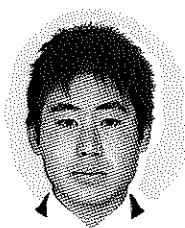
年の大会では、一戦でも多く勝てるように頑張りたいと思います。私は、まだまだ未熟なので、卒業後、就農してやっていけるのかという不安もありますが、将来の夢に向かってこれからの一年間、いろいろなことに挑戦していきたいと思います。

農大に入学しての感想

香川県立農業大学校

果樹園芸コース 一年

國重亮太



私が香川県立農業大学校に入学してから早や一年が経とうとしています。私が農業大学校に

入学したのは、家で祖父が水稲と桃の栽培を行っており、高校の時は農業高校で作物部門を専攻し水稲の栽培技術をしっかりと身につけたので、今度は果樹について学ぼうと思ったからです。入学したばかりの頃は本当に右も左も分からずどのように作業を進めていけばいいのか、次はどの作業を行えばいいのか戸惑っていましたが、先生方のご指導や先輩方、同級生の人達の支えのお陰で少しずつ作業の手順ややり方がわかるようになり、今では毎日楽しく実習に取り組めるようになりました。農業大学校の実習で一番大変に感

じたことは、高校までの作業とは違い、自らが考えて作業を行っていかねばいけないという点です。高校までであれば細かいところまで先生が指示をしてくれるのに対して、大学校では品目毎に一人が一樹を担当し誘引や収穫、剪定など一連の作業について責任を持って行わなければなりません。もし、失敗して収穫量が減ってしまうと、直売や農大ふれあい市という即売会の際に売れる品物がなくなってしまうので、そうならないように毎回の実習に緊張感を持って取り組んだことは、将来農業をしてゆく私にとって今後ともとても良い経験を積めるような気がしています。

勉強面では、農業の基本的な知識から応用された知識を学ぶほか、将来農業を営んでいく上で役に立つ様々な資格取得をすることができます。その資格の中には私が高校時代に取得できなかった農業技術検定や危険物取扱者乙種第四類や大型特殊自動車免許(農耕車限定)や農業簿記検定などがあります。私は将来のことも考えて、取得できる資格は全部取得しようと思っています。この目標を達成するためにも、毎日帰ってから勉強をがんばってみたいと思います。

学校行事の面では、一年生歓迎会や四国地区農学連スポーツ大会、農大ふれあい市など盛り上がる行事がたくさんありました。一年生歓迎会では部門対抗でドッジボールをしたり、焼肉を



実習先でのキウイ収穫作業

したりしました。歓迎会をすることで、まだ話したことのない同級生や先輩方と話せる機会ができ、早いうちに皆と親しくなれました。四国地区農学連スポーツ大会では、野球、卓球、バレーボール、バドミントンの四種目が行われ、私はバドミントンに参加しました。結果は決勝で愛媛農大に敗れ惜しくも二位でした。少し残念でしたが、部活の先輩や同級生と力を合わせて得ることでできた結果なので満足しています。農大ふれあい市では、自分達が丹精込めて育てた果実や、うどん、パウンドケーキなどの加工品を販売しました。大盛況で、開始前から門の前にお客様が並んでくださっていて、用意していたキウイフルーツは一時間で完売してしまいました。私はパウンドケーキを担当していましたが、お客様喜んで買ってくださっている姿を見ると頑張った甲斐があったなと思うと同時に

に、これからも喜んでいただけるように良いものを作りたいという気持ちが強くなりました。

今年一年で私が一番印象に残っている成長できたと思うのは、十月十五日から十二月九日にかけて十五日間行われた農家実習です。これは実際に農業で生活している農家さんや農業法人さんにお邪魔させていただいて研修させていただくもので、私はキウイパードという農業法人で研修させていただきました。やはり、学校とは違い一人一人の動きに無駄がなく、とても効率よく作業をしていました。これを見るとやはり儲けるためにはしっかりと知識を身につけて技術を会得しなければいけないと改めて認識させられました。この一年を通して人間として大きく成長できたように思います。先生や先輩、同級生への感謝の気持ちを忘れず、来年も頑張っていきたいと思っています。

農大に入学して学んだこと

香川県立農業大学校
造園緑化コース 一年

島原 美空



私が農業大学校に入学しようと思った理由は、女性の活躍する造園会社を作りたいと思ったか

らです。庭を作る仕事は男性との体力差があり女性には不利なので、庭の手入れを専門に行う造園会社を作り、将来的には女性の感性を反映したデザインを描けて、デザイン重視の簡単な新しい今風の庭も作れる庭師さんになりたいと思っています。

私が庭に興味を持ち始めた理由は、両親が広い庭を作るために引越すほどの庭好きで、家族旅行で京都や東京の庭を見に連れて行ってくれたからです。そして、庭の手入れを手伝った時に綺麗になった庭に達成感を感じ、家族が喜んでくれた事が嬉しかったからです。

造園会社を作るという夢に向かって、私は、七月に四つ目垣と敷石施工の実技テスト、葉や枝を見て木の名前を言う要素試験、筆記テストからなる造園技能検定三級に無事合格しました。造園としては簡単な作業ですが、何度も練習してやっと合格したので、とても嬉しかったです。

二年生になると、秋に造園技能検定二級の試験があり、三級よりも大きく重い石を扱わなければならないレベルも高くなるので、デザイン力だけでなくどんな実習を行い、体力もつけていきたいと思っています。また、二級造園施工管理技術検定の学科試験の資格も取得できるので、しっかりと勉強をして絶対に受かりたいと思います。

農大での講義では、授業の一環として栗林公園などのいろいろな庭園を見



マツの剪定作業

学に行けたことが、すごく良かったと思いました。私は、良いもの、美しいものを見るのはデザインのセンスを磨くために大切なことだと思うので、今後も自分で積極的にいろいろな良いものを見て勉強したいと思っています。

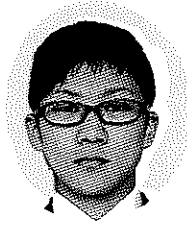
最後に、実は私は、高校二年生の時までは、ネイリストになりました。で、美容関係の専門学校に行こうと思っていました。しかし、就職に結びつけることを考えて、次に興味のあった造園の勉強ができる農業大学校に入学を決めました。学校に通い始めてからは、これまで以上に造園に興味を持つようになる、実習のたびに知る事が一つ一つ増えていくのが楽しくて学校に通っています。現在、私は家では趣味のネイルチップの製作、学校では庭についての勉強という、二つの好きなことをして毎日をおくっています。とても幸せだと思っています。そして、ど

ちらもデザイン性が問われる事なので、これからも自分のセンスをさらに磨いていきたいと思っています。

農大で学んだこと

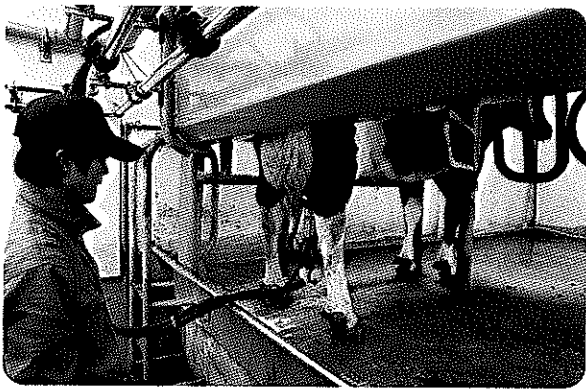
香川県立農業大学校
畜産コース 一年

半田 光明



私が、香川県立農業大学校の畜産コースに入學して一年が経とうとしています。私が農業大

学校へ入学しようと思ったのは、農業高校で飼育していた牛についてもっと深く専門的なことが学びたいと思ったからです。高校では肉牛の肥育しかしておらず、乳牛の搾乳や子牛を産み育てるといったことをしていませんでしたが、農業大学校ではこれらのことに加え、畜産のことを農家や畜産試験場で実習させてもらえると思い入学を決めました。農業大学校に入學してから家畜生理・解剖、家畜飼養や飼料作物など基礎的なことから始まり、牛以外にも豚や鶏、ミツバチなど畜産全般のことを学んでいます。また、農畜産概論や農業経営、農業簿記などの畜産以外の農業全般のことを学んでいます。また家畜人工授精師や農業技術検定などの専



酪農家で農家実習

門の資格が取得でき、とても楽しい新鮮な日々を送っています。学校生活を通じて農業の大変さや厳しさが分かり、農業は奥が深いと思いました。去年の十月から十二月にかけて延べ約二週間、酪農家へ農場実習に行きました。そこでの作業は搾乳から子牛の世話まで一通りの作業をさせていただきました。それにより牛の習性を間近に観察できました。農家さんからは、餌の配合や牛の病気の対処法をはじめ、酪農の難しさややりがいなど様々なことについて教えていただき、とても良い経験ができました。

この一年、畜産の勉強はもとより、いろいろな人と出会いました。他のコースの野菜、花き、果樹、造園等のこれからの農業に夢をもった友達がで

きました。それに伴い私の農業に対する視野も広がりました。そして、牛以外の家畜も興味を持ちました。特に興味を持ったのがミツバチです。ミツバチは、ハチミツを取るだけでなく、イチゴなどの果実をつけるための受粉に使っています。自分の知らなかった様々な役割を知り感動しました。

農業大学校の生活もあと一年となり、これからは、二年生としての自覚を持ち、自分の進むべき道の就職活動に頑張っていきたいと思っています。そしてあと一年残された時間を有意義に使っていくつもりです。

私の農業へのビジョン

徳島県立農林水産経営情報センター農業大学校
アグリビジネスコース 二年

浅井 悠司



私は現在二十七歳で、農大卒業後、四月から地元徳島の鳴門で就農します。以前はサラリーマンでしたが、農業の労働環境の良さ

と自由さに惹かれました。私は実家が農家でないため、新規就農には苦勞もありました。

まず農地の取得が大変で、私には親戚に農業を営む人もいなかったため親戚を頼ることもできず、市の農業委員

会や農林水産課の方に借り手を募集している農地を紹介してもらったり、航空写真で耕作放棄地を探して現地に行ったりしました。しかし、余っている農地は条件が悪い土地が多く、諦めそうになることもありました。そんな時に市役所の方から連絡があり、やつとのことで農地を借りることができました。借りることができた農地は約五十haの畑地で、周囲は鳴門の特産物である梨畑に囲まれていて、周囲に川もあり、水には困らない土地です。市役所の方や地権者の方には本当に感謝しています。そして、ここでは当面キャベツの栽培を行いたいと思っています。

そんな私には目指す農業があります。それはとにかく「新しい農業」です。今着目している作物は薬草や山菜です。薬草は農大のプロジェクト研究でミシマサイコを栽培し、山菜は山フキやタラの芽について学んでいます。これらの作物に着目したのは、いずれも比較的マイナーな作物で、自分の手で普及させてみたいと思ったからです。また需要も年々伸びており、将来有望な作物でもあると思います。

また技術面でもどんどん改良を加えていきたいと思っています。現在農家で行われているミシマサイコ栽培ではマルチを掛けずに栽培しているため、雑草の管理が大変だったり、農地もあり条件の良い場所を栽培しています。そこで私は、プロジェクト研究でミシマサイコ栽培を行い、既存の技



卒論作成中!

術を改良しています。

農大では他にも養液栽培の一種である噴霧耕栽培を行いました。噴霧耕は培養液を植物体の根に霧状に噴霧して生育させる栽培法です。噴霧耕は農業の現場で実用化されている技術ではありませんが、徳島大学で朝鮮人参の栽培に成功しており、将来性のある技術であると思っています。そのような噴霧耕栽培をするうちに装置の作成や培養液の管理等、養液栽培の技術が身につきました。就農後はそれらの知見も活かしたいと考えており、露地栽培にかんがい設備を設置し、同時に施肥も行なうシステムを開発したいと思っています。かんがい設備をつけることで、マルチをしていても施肥が容易である、常時一定の水分を給与可能である等、多くの利点があります。この技術ならばハウスで固形培地耕等を行うのに比

べてコストが安く、気軽に導入することができるとが強みと思っています。当面は以上のように農業を進めていくつもりですが、その後は農業生産法人を立ち上げたいと思っています。積極的に雇用も行き、経営規模を拡大していきたいです。また、農地の集約も行ってほしいと思っています。集約された農地でキャベツ栽培を行うことができれば、キャベツ収穫機を導入して効率的な経営ができると思います。そしてその過程で、耕作放棄地や、農家の方が高齢で耕作することが難しい農地を借り受けて耕作することで、地域に貢献することもできると考えています。そのようにキャベツ栽培をしながら、薬草、山菜栽培を実用化していきたい、将来は鳴門をキャベツ、薬草、山菜の一大産地にしていきたいと思っています。

就農後に目指す 私の農業経営

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
地域資源活用コース 二年

東 條 勝 也



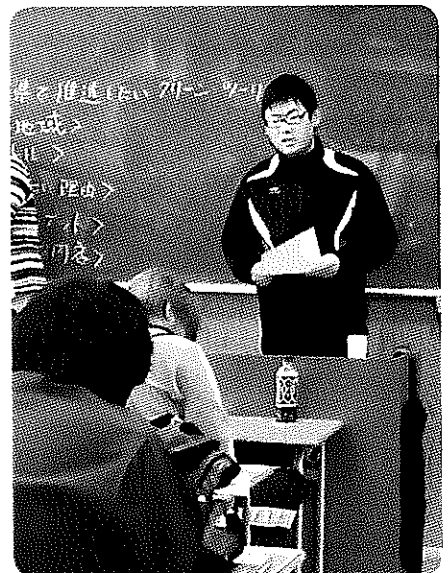
私の家は、およそ七十 a の畑で、夏は「枝豆」と「水稲」を、冬は「カブ」を中心に栽培している兼業農家です。以前は、専業で行っ

ていましたが、次第に農業収入だけでの生活は厳しくなり、現在は、母は勤めており、父と祖母が作業の大半をこなし、私が休日に手伝っています。私は、この春徳島県立農業大学校を卒業すると同時に就農し、実家の農業経営に本格的に従事します。

私が就農しようと思っ

たきっかけは、中学生の時に、父と祖母が大変そうに作業をしている姿を目にしたことです。父と祖母は、春にはカブの収穫や枝豆の防除、夏には枝豆の収穫や水田の管理、秋には枝豆とカブの栽培のためのビニールパイプハウスを建て、冬には厳しい寒さの中カブの収穫を二人っきりで行っていました。日頃からそれを見ていた私は、「父や祖母を助けたい」と思うようになり、就農することを決めました。そのため、中学校卒業後は、農業について学びたいと思い、農業高校に進学しました。農業高校では、授業や実習を通じて野菜の栽培方法や農業機械の使い方、農業の使用手法など、農業を基礎から学びました。

さらに農業について学びたいと思っていたところ、県の農業大学校で開催された「緑の学園」という行事に参加して、農業大学校の授業や作業を体験することができ、進学を決めました。



授業で経営計画を発表

農業大学校では、実習やプロジェクト研究で作物を栽培したり、農業体験学習で農家へ研修に行ったりと、より深く農業について学びました。特にプロジェクト研究では、卒業後の農業経営を考え、実家で栽培している枝豆の栽培をテーマに選びました。

プロジェクト研究で野菜を管理している時、「自分が農業大学校に通っている間は、父と祖母はこのように苦労をしているんだ」と思いました。この時「農業は大変重労働である」、「苦労して野菜の管理に励むことは、品質の良い野菜を作るためである」と実感しました。

農業体験学習では、実家の農業とは違った農作業を体験することが出来ました。体験学習の目的は、「就農後の農業経営に活かせる知識や技術を習得すること」でした。研修先の農家は、ニンジン・ブロッコリー・トウモロコシ等を栽培している専業農家でした。

この研修では「野菜は適したサイズで収穫する」ということを学びました。研修先の農家さんによるとサイズが大きくても小さくても安値になってしまいう、品目や時期、出荷先によって適するサイズがある、そうです。この経験を活かし、就農後は播種時期やビニールハウス内の温度管理から気を付けたらと思います。

就農後は、現在のカブや枝豆を中心に低コストで栽培できる新たな作物、プロッコリーを導入しようと考えています。体験学習先で、「プロッコリーはコストがあまり掛からない作物である」と言う話を聞いたのがきっかけです。

しかし、低コスト栽培は、「小面積では収入が少ない」という問題点があり、これが栽培する上での課題とも聞きました。しかし、新規に導入するのだから、あまりコストをかけないよう小面積から始めたいと思っています。また、異常気象等による生育不良の発生も考えられますので、その地域の気候に適した作物を小面積で導入し、徐々に拡大していくことが大切なことだと思っています。

また、プロッコリーとともにナス導入を考えています。収穫作業が大変ですが、収量が多く高収入を図れると思ったからです。

しかし、ナス栽培は多くの資材が必要なことなどプロッコリーより栽培が容易でないことが分かっています。そ

のため、ナス栽培の気候条件・土壌条件、知識等を幅広く学び、先進地を見学したり、必要な施設・費用などをよく検討し、十年かけて栽培を成功させたいと思っています。

我が家の農業所得は今現在、年間五百万円程度ありますが、就農後、まずは年間七百万円以上の農業所得を目標におき、将来は一千万円以上の農業所得を目指し、農業の企業経営者になりたいと考えています。

これまでを振り返って

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
アグリビジネスコース 一年

池田 将 一



私の家は徳島市にあり、農家ではありません。元々農業に興味はなかったのですが、農業高校に入学し、植物活用科で草花、バイオテクノロジー、野菜、果樹、多種多様なことを学んでいるうちに農業に様々な問題があるように思いました。

まず、農業のデスクワークの部分は、農大では、先生方が担っていただいています。就農すると一番大事な部分と言えます。例えば、まずは圃場をどう使用するか計画を立てなければなりません。何月から何月まで、どの作物

を育てるのか。連作障害を避けるために数年先のことまで見通して考えなければなりません。また、昨今は、収穫物の出荷先を工夫することで収益をあげている農家さんも多くいると聞き、いわば経営者としての才覚が必要になります。

次に生産と技術です。土地作り、播種、施肥、防虫防除、収穫、出荷調整、簡単に上げるだけではありません。今農業は高齢化の一途を辿っています。高齢化による体力の低下で農作業に支障が出てしまいます。万が一身体を壊してしまうとその畑は誰も使われない土地になってしまいます。

そして災害にしっかりと対策を行っていないと台風に因る大雨や暴風で農作物に被害が及んでしまい、農作物に被害が起きてしまうとその農作物の収益が下がってしまいます。これらの解決に向けて自分が少しでも手助けをできたらと思いました。そして農業の基礎を一から学んでいる内に農業についての興味が沸いてきて次第に農業に関連した仕事に就きたいと思うようになりました。母にも『これからは農業の時代が来ると言うから、農業関係の仕事に就くのは正解だと思っよ。』と言われ、担任の先生にも『農業大学校に進学してみてもいいんじゃないか。』とすすめられ、徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校に入学しました。農業大学校では農業高校で学んだ知識や技術とは違うことや、さら

に進んだものを授業や実習を通して教えていただいて自分の知識が身に付いていくのがわかり、同級生と一緒に野菜を育て交友関係を築いてきました。

この徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校には徳島農大とそうじゃという模擬会社があります。この会社は、私達学生の若さを生かし、新技術を開発・改良に取り組み、地域社会や農家の人たちに貢献するようにしたり、徳島の隠れた資源を活用することで、地域の活力アップを目指したり、徳島の農業の発展に寄与する人材になるよう、自らを高めます。

模擬会社とそうじゃの活動は、他にもあります。農業大学校や研究所で生産された農畜産物の販売やその加工をします。また農業大学校や研究所で開発した新技術や商品の流通企画、生



白菜の定植準備中

産者等からの依頼による実証展示などの請負をしています。私はこの模擬会社をそうじやで、自分の経営力を上げ自分自身の能力アップや地域社会の活路上昇を目指したいと思っています。

そして、この農業大学校には農大祭があります。農大祭は年に一度の一大イベントで様々なところからお客様がいらつしやいました。この農大祭には様々な店があります。まず野菜売り場があり、ゆず果汁などの加工品売り場、あと花売り場もありました。この売り場は開始十分前から既に長蛇の列ができていて朝から昼までひっきりなしにお客さんが続いています。他にもフライドポテト、揚げたこ、パットライスなどを売っている模擬店やサツマイモ掘りやミカン狩り、キクの摘み取り体験、ほかにも様々な店がありました。私は野菜売り場を担当していたのですが、とてつもない人の多さで最初見たときは驚きました。しかし接客をしていくうちにだんだんと余裕が出てきて最後には笑顔で応対できるようになりました。とても楽しかったです。

農業大学校に入ってから八ヶ月半経ちます。私はさらに農業に関して知識を深めていきたいです。農大卒業後は、農協などの農業関連の企業や法人に就職し、様々な農業の問題を少しでも早く解決できればいいなと考えています。

将来やりたい農業

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
生産技術コース 一年

入口 恵 輔

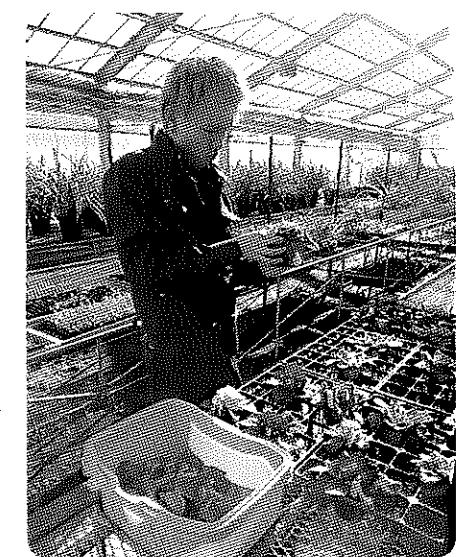


私が農業に興味を持ったきっかけは二つあります。一つは日本の食料自給率が四十パーセント

だということ。いつも普通に食べている物がほとんど輸入しているとは知らなくてショックを受けました。二つめは高校生の時に農業関係のアルバイトをしていた事です。私の高校は通信制で、学校に登校しない時はアルバイトをしていました。色々なアルバイトをしていましたが、その中でも農業の仕事が一番楽しかったです。主にした仕事は、ヒヨコからニワトリまで管理するブレイラー、鳴門金時の収穫、出荷調整、育苗会社の接ぎ木苗の管理作業です。このなかでも一番興味をもち、真剣に取り組みたいと思ったのが畜産の仕事です。畜産の仕事は本当に様々な仕事があります。私は牛の受精卵移植の技術と牛や馬を売り買ひする仕事にとっても憧れ、牛の事を学び、将来私自身で牛の会社を立ちあげようと思ひ、徳島県農業大学校に入学しました。

牛の受精卵移植の資格を取るために、去年の夏に徳島農大で行なわれた家畜

人工授精と家畜商の講習会に参加しました。講習会の最初に分厚いテキストを渡され、人生で初めて必死かつ真剣に勉強したと思ひます。講習会は一カ月間あり、半分勉強、半分実習でした。試験は合格基準が六十点以上でした。最初はとても難しく思ひましたが、好きな事を学んでいたのが楽しく、本当に早い一ヶ月でした。



花の実習

その中でも関係法規、繁殖生理などは難しすぎて、自分でもどんなに勉強したのかわかりません。実習は畜産研究所でおこなわれ、牛の発情検査、体側、生殖器の解剖などがありました。実習の中でも本当に嬉しかったのが受精卵移植をしていく所を実際に見ることができたことです。受精卵はどうなっているのか研究室で見せてくれました。残念だったのが採卵している所を見る事ができなかったことです。受精卵移植の技術を見た時、人工授精の技術がないと受精卵移植の試験を受けられない理由はわかった気がします。それと同時に人工授精の資格は私の目標に向かう第一歩だ、この資格は取ってからがスタートだと思ひました。牛に興味があるだけで何も知らない私には学ぶ事が多く大変でしたが、家畜人工授精の資格を取る事ができました。合格の時の喜びは一生忘れることがないと思ひます。

資格を取ってから今は酪農家さんの所でお世話になりながら人工授精の練習中です。社長は受精卵移植の資格をもっており、色々な所から頼まれて人工授精をしています。どんなに疲れていてもいつも優しく教えてくださり、本当に感謝して私も早く農家さんに頼りにされ、困った事があるといつでも助けに行ける人工授精師、受精卵移植師になりたいと思っています。農業大学校の勉強、実習も頑張り、卒業してから経験をつんで目標の受精卵移植の資格をとり、徳島の畜産業界を盛り上げていきたいです。

